

## 会 議 録

会 議 名	八王子市社会福祉審議会児童福祉専門分科会 子どもにやさしいまちづくり部会 平成27年度 第2回会議	
日 時	平成27年11月10日(火) 午後6時00分～ 8時00分	
場 所	八王子市役所 本庁舎 805会議室	
出席者氏名	委 員	井上仁部会長、中込順子副部会長、荒井容子委員、石田健太郎委員、岡崎理香委員、後藤高浩委員、立石晴美委員、田中伸幸委員(部会長、副部会長、以下五十音順)
	関連所管	なし
	事務局	平塚子どものしあわせ課長、佐藤児童青少年課長、福田子ども家庭支援センター館長、本間主査、川上主査、坂井主査、永井主査
欠席者氏名		
議 題	1 「地方自治と子ども施策」全国自治体シンポジウム2015について 2 「子どもにやさしいまちづくり」について 3 その他	
公開・非公開の別	公開	
非公開理由		
傍聴人の数	なし	
配付資料名	○子どもにやさしいまちづくりの推進 ○「子どもの参加」のはしご(シンポジウム追加資料)	
会議の内容	別紙のとおり	
会議録署名人	平成28年 2月 1日 石 田 健 太 郎	

【井上部会長】第2回目の会議を始めます。

最初に、子どもをテーマにした自治体シンポジウムに課長等が参加されたようですので、その件の報告をお願いします。

【平塚子どものしあわせ課長】小澤部長が子どもの居場所の分科会に、福田館長が虐待防止の分科会に、私が子ども計画の分科会に出席しました。子ども計画の分科会では、八王子市の計画について報告をしまりました。先ほど開催した本市児童福祉分科会でも少しだけ触れましたが、子どもにやさしいまちづくりを考えるうえで貴重なシンポジウムだったので、改めて報告をさせていただきます。

分科会は、相談・救済、虐待防止、居場所、参加、計画、条例、連携・協働と、全部で7つありました。子どもにやさしいまちづくりを進めるうえでは、それぞれが柱となるであろうと思います。「相談・救済」では、子どもがいじめに遭うなど困ったときにどれだけ寄り添えるか、身近な相談先の必要性などが紹介されていました。「居場所」では、高校になってからの居場所が取り上げられていました。東京で言うところのチャレンジ校のような学校の中に、NPOが居場所を作っているという事例がありました。「参加」では、子どもをゲストではなくパートナーとして、未来の主権者ではなく今の主権者として、参加してもらいましょうという提言がありました。資料をご覧ください。

(資料「子どもの参加」のはしご(シンポジウム追加資料)について説明)

次に、「計画」では、子どもにやさしいまちが計画に位置づけられている中で、施策としてどういう取組をしていくか、という話がありました。「条例」では、そうした取組の継続性を担保していくうえで条例化が必要であるとされ、本市もその方向性で考えております。「虐待防止」では、0歳0か月の赤ちゃんが命を落とす割合が高く、問題提起されていました。

【福田子ども家庭支援センター館長】「子どもの虐待防止」分科会に参加して感じたところを申し上げます。

望まない妊娠をした方に対して出産までサポートし、特別養子縁組をあっせんしているという産婦人科の先生の話がありました。その先生は、「赤ちゃんがおなかにいる間、赤ちゃんを守ってくれてありがとうございます。」と産んだ方に伝え、次の出会い、結婚につながるような励ましの言葉をかけてケアするそうです。養子縁組する親にも、その産婦人科で出産の疑似体験をしてもらい、子どもを授かる実感を持ってもらうそうです。こうした取組を全国でネットワークを組んで取り組んでいるとのことでした。

また、報道でご存じかと思いますが、義理の父親が中学2年生に日常的に暴力を振るい、自殺に追い込むという事件が昨年西東京市であり、シンポジウムの開催地である西東京市より報告がありました。学校では、父親の暴力による生徒のあざなどを把握していましたが、外部に相談しなかったそうです。そこで、西東京市では、絶対にこのような悲惨な事件を二度と起こしてはならないし、風化させないように、西東京市の先生方に、繰り返しこの事件の重要性を伝えていくそうです。この生徒は、児童館にも遊びに行くことがあったそうで、事前に情報を知っていれば児童館において違う立場からの支援もできていたはずですが、情報共有を行わずに適切な対応ができなかったというのは、死亡事例にみられるパターンです。八王子市でもこういうことは絶対に起こしてはならないと、改めて思いました。

【井上部会長】八王子市は子ども家庭支援センターが分散していますので、情報共有が課題ではないでしょうか。

【福田子ども家庭支援センター館長】八王子市も中学校区で要保護児童対策地域協議会を組織し、民生委員、保健福祉センター、警察などから出席していただき、心配な子どもたちの情報共有に取り組み始めたところです。順次学校に参加を呼び掛けています。

【平塚子どものしあわせ課長】続けて子どもの意見発表会の事後報告がございます。

【佐藤児童青少年課長】8月30日の発表会の時に、高校生が商店街に関するプレゼンを行い、それがとても良かったと教育長が感想を持ち、後日教育長が商店会連合会会長と会った時に、一度聞いてみては、と提案したところ、先週、11月2日に商店会連合会会長、それからこの審議会の委員の青木委員にも参加いただき、高校生に10分くらいプレゼンしてもらい、30～40分、意見交換しました。

【井上部会長】この部会への子どもの参加についても早く考えなくてはなりません。

では、次の議事に移ります。「子どもにやさしいまちづくり」について、皆さんの意見を伺いたいと思いますが、まず資料の説明を事務局からお願いします。

【平塚子どものしあわせ課長】(資料「子どもにやさしいまちづくりの推進」について説明)

以上、議論のたたき台としてお示したところです。特に、何のために条例をつくるのか、条例をつくとどうなるのか、というところを意見交換していただければと思います。

【井上部会長】ここに「遊び」という概念も入れる必要があると思います。委員の皆さん、いかがでしょうか。

【立石委員】どんなに子どものためにと考えて作ったものでも、一番数の多い高齢者が満

足いく方法を取らないと、うまくいかないのではないかと心配しています。地域と学校とで、といっても、学校に行く機会があるのは自治会長さんなど限られた方だけですから、もっと広く一般の高齢者も巻き込み、協力を得られる体制をとる必要があります。

【田中委員】どんな大人になってほしいかという視点から考えてみると、主体性を発揮し、自分に誇りを持って働き、生きていける、正しい方向に進んでいける力をつけてあげる、そのようなことかな、と感じました。具体的には、キャリア教育の充実、児童会や生徒会だけによる朝礼の実施、ノーチャイムなど、自分たちのことを自分たちでできる力をつけてあげることが「やさしい」につながるのかな、と思いました。また、児童養護施設で暮らす子ども以上に厳しい環境で暮らす子どももいます。様々な境遇の子どもに公平な教育の機会を確保する、というのも「やさしいまちづくり」の中に入れていただきたいと思えます。

【井上部会長】フェアスタートという言葉があります。経済的格差や家族の有無によらず、どの子どもでも同じようにチャンスがあるべきという考え方です。施設にいる子どもは、18歳、20歳で支援が打ち切られてしまうわけですが、進学の問題など、どう支援していくか。経済的支援が必要な子どもたちがたくさんいます。こういう訴えをするかしないか。税金にも限りがありますし、知恵が必要です。

【平塚子どものしあわせ課長】確認しますと、フェアスタートという概念は根幹として大事なところということによろしいですね。

【井上部会長】はい、そうです。

【平塚子どものしあわせ課長】それと、子どもの育つ姿、子ども像というのは、条例の目的としてとらえるのか、環境整備の結果としてとらえるのか。

【井上部会長】いきいきとした子ども像、参画という中で、そうした子どもが多くなるのが理想ですが、全ての子どもがそうなるというのは難しいですから、期待というところによろしいのかと思います。結果としてそうなることは期待できますが、目標や目的にはできないと思います。

【中込副部会長】八王子市教育委員会には教育目標があって、そこにはあるべき子どもの姿があります。目標とともに課題や重要施策も示されています。子どもにやさしいまちをつくることができれば、課題の解決につながるだろうと思います。また、前回も申しましたが、やさしいまちとはいえ、ただやさしいというのではなく、そこにはルールも必要ですし、子どもに責任も発生します。子どもを育てるという課題も忘れてはなりません。

この頃、地域の行事に参加する子どもの数が数年前と比べずいぶん少なくなっているのを感じます。

【立石委員】地域のスポーツクラブとかで活動している子どもも増えました。例えばスポーツクラブの試合に参加すると、地域行事に参加できないということがあります。

【井上部会長】大人の都合で大人がやりやすい日に行事を設定している側面もあります。子どもが参加する行事が地域で重なってしまうことがあるなら、それは地域での連携が取れていないとも言えます。そのあたりは、子どもたちは大人に言ってもどうせ聞いてもらえないとあきらめているところで、子どもたちが主体的に考えられる素地があれば、違ってくるのではないのでしょうか。そのあたりは、この部会でも意識していきたいと思います。

【岡崎委員】2年続けて子どもの意見発表会に出席しましたが、特定の一部の子どもの意見であって、それを全体の意見として聞いてしまうのは違うと思いました。全体のつながりが感じられないのは、子どもが子どもに発信していないのも要因かもしれません。子どもが所属している、例えばサッカーチーム、子ども会など、様々なグループがありますが、そうしたグループ同士をゆるやかにつなぐような仕組みをつくってあげられたらと思いました。そうすれば、もう少し子ども同士がつながるのではないのでしょうか。

また、キャリア教育の大切さの話が田中委員からありました。八王子市が平成22年に実施した中高年世代アンケートでも、人の役に立つ、生きがいがある、と感ずることが幸福度の高さにつながるという結果が出ていました。子どもも地域の中で役に立っていると意識できたら、また、将来就く仕事が誰かを幸せにするものだと考えられたら、子どもたちもやる気が出るだろうな、と思いました。

あと、子どもにやさしいまちづくりには、大人の意識改革が必要です。中には子どもを疎ましく思う大人もいるようですが、高齢者は子どもとの関わりに喜びを感じることができずです。例えば、八王子市に高齢者活動コーディネートセンターというのがあって、お手玉、紙芝居、コマなどの技能を持った高齢者が登録し、市内で活動している団体などから依頼を受けて登録した高齢者を派遣しています。こうした活動を増やして、学校などがたくさん呼んでくれたら、お互いに喜びを感じられると思います。

最後に、格差についても大きな問題です。みんなの元気を失わせるひとつの原因となっています。全てのバリアフリーを考えたときに、身体的、健康的格差をもった子どもが、健常児に混ざって学べないという状況が気がかりです。難しいことは重々承知の上なのですが、条例化するなら、そういうことが改善されるような内容を入れてほしいと思いま

た。

【井上部会長】そういう教育は、理想として掲げてはいるものの、日本では遅れているところ。ハンディキャップをもった子どもと健常児が関わり合うことがないと、異質を排除しようとする考え方が改善しませんから、そうした考え方を盛り込めたらと思います。

【立石委員】理解がない親にも条例化が効果を発揮すると思います。

【平塚子どものしあわせ課長】補足ですが、八王子市には、既に「障害のある人もない人も共に安心して暮らせる八王子づくり条例」という条例があります。そこで触れられてはいるのですが、ただ、あまり浸透していないのかもしれませんが。

【井上部会長】目立っていないですね。次回資料の提供をお願いします。

【後藤委員】条例化するということは、強制力があることを踏まえ、何を強制させるのか決めないと意味がありませんが、その強制力は、子どもではなく、大人に向けてのものになると思います。子どもを幸せにするには、大人が幸せでないと難しい。まず家庭が幸せであること。それには父親の子育て参加も必要でしょうし、企業を巻き込むことも必要かもしれません。どうしたら家族全体の幸せにつながるかという視点を盛り込んでほしいと思っています。

また、生きる力を養う教育、幸せになるための教育の話がありましたが、大事なことだと思います。目先のやさしさではなく、将来の視点で考えたいと思います。

【井上部会長】子どもがめざす大人の姿がないといけません。子どものいいモデルとなるような形で八王子の中で大人が暮らせる、そういうまちをどう作っていくかということが課題となってきます。

【後藤委員】自分の将来の結婚や子育てについて否定的なことを言う子どもが多いので、なぜかと聞くと、自分の親の姿を見て言っているわけです。そこをどう解決していくかです。

【井上部会長】理念だけでなく、どれだけ具現化していくかが問われると思います。

【平塚子どものしあわせ課長】八王子市は、理念だけの条例は作らない考えです。

【荒井委員】後藤委員の話と重複するかもしれませんが、子どもが生活する理想の姿を求めるにしても、それには子どもを支える家庭が前提にあると思います。しかしながら、大人に余裕がありません。子どもだけでなく、大人への支援が必要ではないか、と思います。大人への支援は、出生率が上がることにもつながるのではないのでしょうか。また、せっかく学生が入ってきているのですから、学生が八王子に魅力を感じ、八王子に残って子育て

をしていくことにつながるという期待も持てると思います。

【井上部会長】子育て支援のセーフティーネットを、啓発事業も含めてどう作っていくか。しっかり制度化していかないと、市の担当者が変わるとやることも変わってしまうのではいけません。市民力をつけて生かしていくことも必要です。例えば子ども委員会を作ったら、子どもの意見を求めるときには児童会、生徒会などが利用できるでしょうが、大人はどうでしょう。自治会や子ども家庭支援センターに協力してもらい、そのネットワークを利用して意見聴取できるかどうか。

さて、策定スケジュールを見ると、部会としても子どもの参画をどうするかが問われるのですが、以外と時間がないようです。選ばれた特定の子どもの意見ということになってしまふといけませんので、年明けには公募をかけて、新年度には子ども同士で議論する場をスタートさせるようかと思うのですが、事務局では次回、子どもの参画についての素案を用意できますか。

【平塚子どものしあわせ課長】用意したいと思います。

【井上部会長】公募がいいと思うのですが、育成会、児童館などからも入ってもらってもいいでしょう。

【田中委員】いろいろなところから参加してもらおうほうがいいでしょうね。

【石田委員】養護施設等からの参加も考えられます。一方、こうした参画は、いわゆる「いい子」ばかりになりがちなのですが、様々な子どもに参画してほしいと思っています。

【井上部会長】では、事務局は次回に素案の提示をお願いします。委員は仕組みづくりについて考えてきてください。

時間になりましたので終了します。